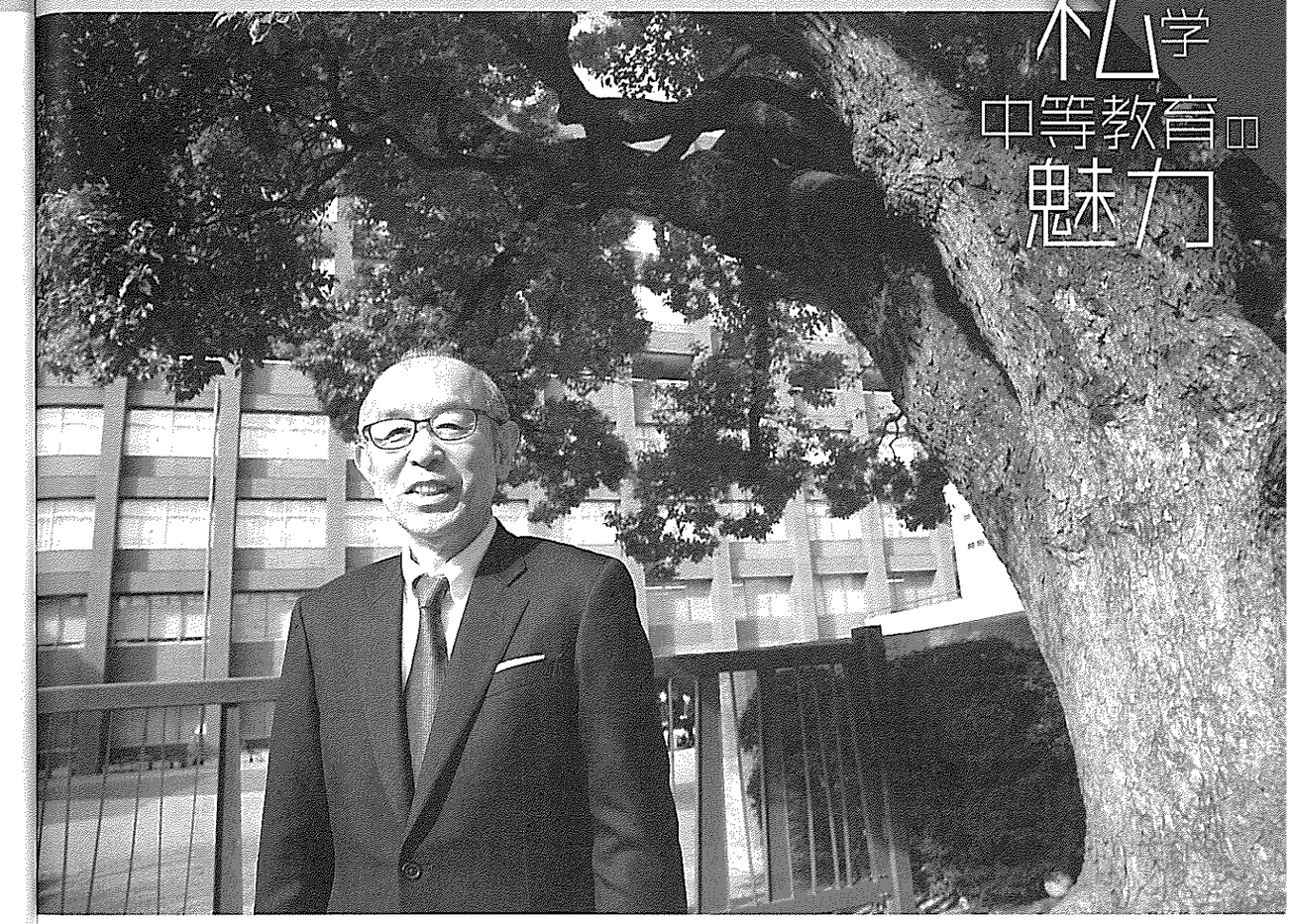


一人ひとりの生徒に寄り添い未知の世界へ共に向かう

社会が激変するという議論が熱を帯びる中で、「新しい学力」「新しい人間力」という「時代が求める力」の育成を掲げ、改革を続けてきた同校は、際立って注目度の高い中高一貫校です。同校が描く教育ビジョンとはどのようなものなのか、柴田校長先生にうかがいました。

柴田 澄雄 先生

Sumio Shibata

海城 中学高等学校 校長

社会の変化に対応し未来を担う新しい紳士

▼貴校では、リベラルでフェアな精神を持った「新しい紳士」の育成という教育目標を前面に打ち出しています。それはどのような人物を指すのでしょうか。

リベラルであるというのは自分にとって良きこと、自分にとっての幸せは、自らの自由意志に基づいて選択、実行、実現していくという意味です。またフェアな精神とは、公正さを重んじる精神です。平たく言えば、立場を入れ替えたときに自分が受け入れられないことを、他人に対してすることを潔しとしない、という倫理観です。

▼128年の伝統を持つ進学校である海城が「新しい紳士」の育成をめざすことの意義とは?

本校は1891(明治24)年に古賀喜三郎によって創設されました。古賀は佐賀藩出身で幕末明治を生きた人物です。向上心がとても強く、長崎で蘭学を学び、20歳の時に長崎に停泊していたイギリス海軍の船に上船し、技術伝承を受ける機会を与えられました。

そこで接した海軍の士官に古賀は大きな影響を受けました。貴族階級の人物ならではの佇まいのみならず、教え方や考え方、つまり社会のため、世の中のために貢献するのが紳士の生き方である、という姿です。彼らに感化された古賀は、将来はこうした紳士を育てる海軍のジェントルマン教育に関わっていきたいと志すのです。

戊辰戦争での実績を認められ、海軍兵学校で寮長を務めた後、海軍を退官すると、私財を投じて海軍兵学校に入るための予備校、文字通り「海軍予備校」という名の学校を設立しました。それが本校の始まりです。

つまり創立者が20歳の時に感銘を受けた、ジェントルマン教育への思いを込めて創られたのが本校なのです。それを現代に継承し、「新しい紳士」にこだわり続けているのです。

▼明治期に創立者が目標とした紳士教育を、現在に展開する中高一貫教育とはどのようなものなのでしょう。

中学入学時は、自立心よりも保護者への依存心が強い生徒がほとんどです。それを本校の中高6年間の教育を通じて、自分のことは自分の頭で考え、自分で決定して、自分の力で行動を起こして実現させていくことができる生徒へと育てていくこと。他人との関係においても常に相手の立場を考慮して、相手の立場に立って、フェアな関係を構築維持できるような紳士然とした人間に育てていきます。

時代が求める新しい学力 新しい人間力

▼建学の精神は、現代の海城にどのように活きているのでしょうか。

本校の建学の精神は、古賀が開校式のスピーチで述べた「国家・社会に有為な人材の育成」です。当時は富国強兵が背景にありましたが、現在は地球や人類全体という意味で社会にとって有為な人材と解釈しています。

▼そのうえに「時代が求める力」があるのですね。

自ら考え主体的に行動し 枠組みに捉われない生き方を めざしてほしい

そこで私たちが追い求めるものが「新しい学力」と「新しい人間力」で、これらをバランス良く培う教育を実践しています。

“新しい”という言葉には、時代が要請する力という意味が込められています。私たちは、今ここで学ぶ生徒たちのために、常に時代が必要とする具体的な能力要件は何かを見定めていかなければなりません。また、入学してくる生徒たちの特性も時代と共に変化していますから、目の前にいる生徒たちを見据えて、効果的な学びを常に模索していかなければならないと考えています。

▼それでは「新しい学力」とはどのようなものとお考えですか。

少子高齢化をはじめ、日本は課題先進国と言われています。社会が非常に複雑化していく中で、日本においても社会においても、さまざまな問題が山積しています。かつて西欧諸国へのキャッチアップをめざしていた時代には、解決策を先進国の事例に求めることができましたが、今はそうではありません。山積する問題を自分たちで考え解決していかなければいけない時代がやってきたのです。

そこで求められるのは課題を設定し解決する力であり、それが新しい学力です。その力を育てるために本校が実践しているのがPBL(Project Based Learning)です。問題を発見し、課題を設定し、それを解決するための情報を集めて分析し、熟考して何らかの価値判断を加え、解決方法を選び取り、さらにそれを周りにわかりやすく説明し、協働・実行して解決していく。それが海城の学習です。

▼柴田先生は2015年に校長に赴任されて、PBLを特徴とする海城の「新しい学力」の育成をどのように感じられたのでしょうか。

約40年にわたる国際ビジネスの経験と大学で教鞭をとった経験があります。その中で、日本では、主体的に考えて行動していく力を育むための教育をもっと取り入れていかなければならないと感じてきました。

私が教えていた大学では1年間の留学が義務付けられており、海外の大学で世界中の学生と共に学ぶ機会を学生たちに与えます。その内容の多くはPBLです。

大学で行っているようなPBLを、海城が四半世紀前から実践していることに驚きました。例えば1992年に始まる総合学習では、中1から中3までの社会科の授業、週4時間ないし5時間の約半分の2時間、教科書を使った系統学習ではなくPBLを取り入れています。毎学期課題を設定し、それについて取材したり文献を調べたりして解決策を考え、生徒同士でディスカッションを重ねたりしながらブラッシュアップさせていき、最後はレポートにまとめます。これを毎学期やるのです。

中1の1学期に原稿用紙5~6枚ぐらいのレポートを提出させることから始まり、2・3学期で中1は3回、中2でも同様に3回と書いていくと、20枚くらいのレポートが書けるようになってきます。中3になると1・2学期をかけて各自でテーマ設定をして、最低30枚、多い生徒ですと40~50枚の卒業論文を書き上げます。

▼グローバル化に対応する力の育成という点についてはどのようにお考えでしょうか。

あらゆるものが国境を越えて行き来する中で、国籍や文化が違う人々と関わっていく機会が増えていきます。また、日本においても価値観が多様化していくでしょう。その違いを乗り越えて関わっていくための対話的なコミュニケーション能力が必要です。違う者同士がコラボレーションをして、高いパフォーマンスを生むためのコミュニケーション力を身につけなくてはなりません。

そこで「新しい学力」と同時に重要となってくるのが「新しい人間力」です。

一方で、入学してくる生徒たちを取り巻く環境は変化しており、生徒の特性も変化してきました。部活動や学校行事の中でコミュニケーション力が自ずと養われていけばいいということでは、今の生徒たちには足りません。そこでPA(※1)やDE(※2)といったプログラムを取り入れ、「新しい人間力」を育もうとしているのです。

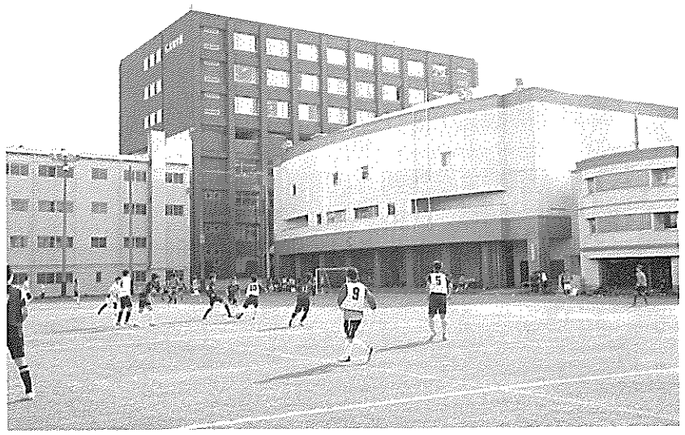
枠組みに捉われない開かれた体験の場 自由な学びの場へ

▼これからの教育ではコミュニケーション力を磨くための体験学習の重要性が、さらに増してくるのですね。

本校の体験学習の代表的なものはPAとDEです。それらをアップデートするために、昨年JAXA(宇宙航空研究開発機構)の共同研究校の指定を受けました。宇宙飛行士を養成するためのノウハウを教育の世界に活用するという研究を始めます。

また、社会科総合学習などのPBLに『KSプロジェクト』という取り組みを加え、進化させていきます。『KSプロジェクト』は、学年・教科・カリキュラムの枠を完全に取り払い、自由に学んでいくことが大きな特徴です。共通のテーマに興味・関心を持つ教員と生徒たちが集まって、放課後や夏休みやそのほかの時間を使い、合宿をしてもいいし定期的に集まってもいいし、いつでもどこでも好きなようにやっていいというものです。

内容は生徒たちの興味・関心をより尖らせるものや、掘り起こすようなもの。そして、文化祭での発表を基本と



※1 PA(プロジェクト・アドベンチャー)
中1・2の春に校外で実施される体験プログラム。立木や丸太、ロープなどを使ったアドベンチャー(冒険)を核とする活動にグループで挑戦し、コラボレーション能力やコミュニケーション能力を養います。

※2 DE(ドラマ・エデュケーション)
ドラマ(演劇)の手法を用いて行われる教育プログラム。グループで創作、発表をする過程で、他者理解や自己理解を深め、対話的コミュニケーション能力を養います。

未知の世界に向かう生徒に寄り添い 共に挑戦をすることが 海城の教育

柴田澄雄（しばた・すみお）
◉1973年早稲田大学政経学部経済学科卒業。三菱商事入社。韓国、サウジアラビア、タイなど15年以上にわたり海外に駐在。2012年国際教養大学 東アジア調査研究センター特任教授。2015年4月より現職。趣味は旅行と読書。

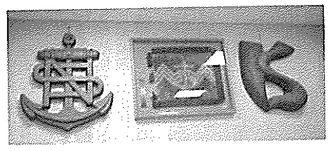
Information

●海城中学高等学校（東京都新宿区・男子校）

設　立：1891(明治24)年、古賀喜三郎が私財を投じて現在の麹町に創立した「海軍予備校」が始まり。1900年に海軍予備校を海城学校と改称。1927年に現在の校地大久保に移転。戦後の学制改革政策により1947年に新制海城中学校、1948年に新制海城高等学校として発足し、現在に至る。

アクセス：JR山手線「新大久保」駅より徒歩5分/地下鉄副都心線「西早稲田」駅より徒歩8分/JR中央総武線「大久保」駅より徒歩10分/JR山手線・地下鉄東西線「高田馬場」駅より徒歩12分/地下鉄副都心線・大江戸線「東新宿」駅より徒歩12分

海軍兵学校への進学者を育てる海軍予備校として設立された伝統校。戦後は進学校として実績を高めていきます。創立101年目の1992年、当時は東大合格者が30人を超え、進学校としての評価が定着する中、学校改革をスタート。生徒会や部活動にも力を入れ、2011年には高校入試を廃止して完全中高一貫制に改め、帰国子女枠も設けられました。以来、特徴ある教育を取り入れた学校改革を行っており、進学実績だけでなく、生徒の将来を見据えた教育での注目度も高い学校です。



験の機会を今後も「グローカル」に増やしていきたいと考えています。

そして、開かれた体験という意味では読書も非常に重要です。日本の学生は本を読む質と量が圧倒的に不足していると思います。例えばアメリカの大学生はだいたい年間100冊ほど読みますが、一方で日本では名門といわれる大学の学生でも年間数冊程度しか読まないのではないでしょうか。

▼グローバルな時代においても読書が必要ということでしょうか。

これからの時代は英語が共通語になるといわれていますが、言語をただ話せればいいというのではなく、その内容が問われていく時代です。その人の人柄や人格は正しい発音で流暢に話せるかどうかではなく、どのような内容を自分で考え、自分の意見で話すかによって評価されます。それは読書によって陶冶されていくのです。

開かれた体験は非常に大切ですが、リアルな体験をする機会には限りがあります。そのために、読書体験があるのです。あらすじを知ればいいのではなく、最初から最後まで、その世界にじっくりと浸るのが読書です。読書体験は自分の体験と置き換えることができます。

▼最後に、これからの教育にかける思いをお聞かせください。

校には128年の歴史があります。これは素晴らしいことです。伝統に裏打ちされた生徒と教員の信頼関係、組織としての強さがあるからこそ、確固たるビジョンを打ち出し、改革に取り組むことができるのです。

本校の校章は戦後改めて創られたものです。一見するとKaijo Schoolの頭文字のKとSのように見えますが、それだけではなく、風の中を航海する船（の帆）を模しています。船は未知なる海に漕ぎ出していく生徒たち、風は船に寄り添って前に進めていく教員たちです。広い世界に向かっていく生徒に寄り添い、一人ひとりの自己実現を支援する。そういう学校に生まれ変わるのだという意図がここにはあります。

『KSプロジェクト』は、これまでの取り組みと違って、すぐに効果が表れたり何かの役に立ったりといった、目先の成果をめざすためのものではありません。本校で生徒たちが身につけたことが、いつか花開いて新たな価値を生み出していくことに賭けようというものです。どうなるかわからない計算不可能なことをあえてやる。ただし、きちんとプラットフォームを作って、未来を信じて実行しよう。本校の教育はそうした新しいフェーズに入ってきたのです。

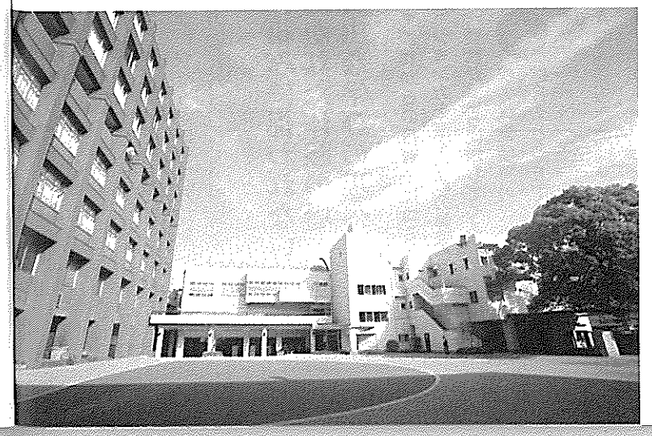
し、コンテストに出る、他校とコラボレーションするというように学外に開かれたものとしています。

▼知識や技能を身につける従来型の学力、教科学習の位置付けはどのようになっていくのでしょうか。

知識・技能は生徒一人ひとりが各自必要なことを学べるように、ICTなどを活用することで個別最適化していきます。知識・技能に関しての学習はなるべく効率的にできるようにして、学校では、先ほどお話ししたような体験や興味・関心をベースとする本質的な学びに時間を費やしていけるようにしたいと考えています。

なぜなら生徒たちは、変化が激しい時代を一生涯学び続けながら生きていかなければならないからです。これからの学びは、その原動力となるものでなければなりません。楽しくて仕方がない、これが好きだ、これをやり続けたい、といった体験が大切なのです。

▼柴田先生は海外でのご経験も豊富です。そのご経験からも、より多くの体験を生徒に持たせることの重要性を実感しているのでしょうか。

学入試や就職活動など日本は一般的な枠組みが多く、中高生たちはその中に閉じ込められてしまっているように思います。本校の生徒には枠組みに捉われない生き方をめざしてほしい。そして、中高時代はのびのびと自分が開かれていく感覚を体験してほしいと願っています。自分が主体的に動いて、どんな小さなことでもいいので、達成感を重ねていくこと。そうした体験によって培われる感覚が大学に進んでからも、社会へ出てからも、しっかりと自分の軸を持って歩んでいける力になっていくのです。

またグローバル化が進む中で、海外ばかりに目を向けるのではなく、もっと身近な地域の交流にも目を向けることが大切です。例えば本校の向かいにある戸山小学校の児童と本校の生徒たちが「ワクワクスクール」などで交流するといった取り組みも行っています。視野を広く持って、社会に開かれた体